

レイプ犯

に車に連れ込まれ

生チンポ懇願するまで

寸止め

され

子作り

セックス

にハマってしまう

真面目巨乳JK

体験版

著者：どん丸

がら堂

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

※眼鏡はすぐに外します

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

沙織は真面目な女子高生である。目立つタイプではなく特別出来る事があるわけではなかったが、誠実なので片手で数えられるほどの仲の良い友人達からは大切にされていた。眼鏡を外せば可愛い顔をしていることは、家族と仲の良い友人たちだけが知っている。

しかし真面目で大人しく制服もあまり着崩さないところや、セーラー服をこれでもかと盛り上がらせる大きな胸が、痴漢達に狙われる所以となっている。尻を撫でられたり胸を肘で突かれたり、硬いものを擦り付けられたり……。沙織は助けてと声を出すことも、誰かに相談することもできず、ただそれを耐えることしかできないでいた。

そんなある日、また痴漢に遭い泣きそうになりながら電車を降り家に帰ろうと歩いていたら、後ろにびったりとくっついて歩い

ていた男に、人気のない公園の駐車場に泊まっている車に連れ込まれてしまうのであった。

この辺りは、女性が車に引き摺り込まれてレイプに遭いやすい場所だったが、沙織は知らなかったのである。

「な、なに……？ 何するんですか……？」

腕を縛られた沙織が無理矢理乗せられた車は八人乗りで、後部座席のシートは外されてマットが敷いてあった。それ用の改造である。沙織にとって唯一幸運なのは、ここにいるのは男だけだということだろうか。

びくびくと震えながら自分を見上げてくる沙織を無精ひげを生やした男はじろりと睨んだ。

「かまととぶるなよ。わかってんだろ？ これから何されるか」

「きやあっ!!」

ビリイツ!

男は持っていたナイフで沙織の着ていたセーラー服の前面を一直線に切り裂いた。しかし中にはまだキャミソールを着ていて、それも同じように切り裂く。

すると、日焼けなど知らなそうな白い腹や、飾り気のない白いブラジャーに包まれたふっくらとした乳房が現れた。サイズが合っていないのか、ブラジャーからは薄ピンクの乳輪が覗いている。

汚れなど一つも知らなそうな沙織に似合わない、男を誘ういやらしい身体に男は息を乱し、両カップの間でちよこんと載っているリボンのあたりにナイフをもう一度突きつけた。

「やだやだ! やめてっ!」

「何がやめてだ！ クソツ！ エロい身体で誘惑しやがって……！」  
「きやあ！ いや！ いや！」

プチッ！ ぶるんっ♡

ナイフで簡単にブラジャーは切れ、元々無理やりサイズの合わない大きな乳房を詰め込んでいたからか、弾けるように白く柔らかい乳房が揺れながら飛び出てきた。大きいのに張りがあり、重力に負けず形を守っている乳房の先端は、覗いていた薄ピンク色の乳輪と同じ色のものがちよこんと乗っている。

「あ、ああっ……うそ、うそ、見ないでえ……」

「おいおいおい、なんだよこのスケベなチチはよお。女子高生が持つてていいもんじゃねえだろうが、ああ？」

「いやあ、やめて、痛いっ！」

男は節くれだった手で目の前にある沙織の乳房を掴んだ。遠慮なく掴まれて形を変える乳房に沙織は顔をゆがめるが、男は一切やめようとしなかった。

「ハアハア、おい、チンポ挟め」

「え、えっ？」

「チンポ挟めって言うてんだよ！」

「きやあ！ ぶたないでえっ……」

「チツ、逃げようとか抵抗しようとか考えんじやねえぞ」

ばちん、と痛くない程度に乳房を打たれた沙織は怯えて泣くが、男は沙織の腕を解放し、立ち上がってズボンとトランクスを下し簡易椅子に座って、沙織の目の前にまだ勃起していない男性器を突き付けた。



「な、な、な、なにを……」

「チチで挟め！」

「や、やります、やるからやめてっ」

涙で濡れる頬をむき出しの肉棒でぺちぺちと叩かれて、沙織はそれが自分の胸の前に来るように膝立ちになった。まだ勃起していないのに大きなそれに、沙織はごくりと唾を飲み込んだ。今までの人生で父親以外のそれを見たことがなかった。

「は、挟む……」

「手え使えよ。チンポを谷間に入れてチチを寄せろ」

「は、はい……」

言われたとおりに、沙織は男の足の間に入って、コンプレックスでもある大きな乳房で、男性器を挟んだ。顎下に男性器の先端が来

る。初めてのことに心臓がどきどきと鐘を打つ。

「あ、あ、あ、あの、ごめんなさい、こんなこと、したことないんです。ごめんなさい。やりかた、わ、わかんなくて……」

「ああ？　こんなエロイ身体してて初めてなんてことあるかよ」

「ひっ、ご、ご、ごめんなさいっ、本当なんです、だから怒らないで……」

「チツ、めんどくせえな。チチでチンポ擦れ」

「こ、こする……。こ、こうですか……？」

「……そうだ。そのままチンポ勃たせろ」

「た、たたせ……」

「そのままやってりや勃つ。おい、顔はこっち向けろ。……眼鏡外せ」

「はい……」

乳房から男性器が離れぬよう二の腕で押さえた沙織は、空いた手で眼鏡を取って誤って踏まなそうな床の端に置いた。そしてもう一度手で乳房を押さえ、男性器をこすりながら、男に言われたように顔を上げる。

「フン。かわいい顔してるじゃねえかよ。おら、わかるか？ チンポ勃ってきてんだろ」

「あ……。は、はい」

自分がレイプされそうだというのに、沙織はかわいいと言われて頬を紅潮させた。家族や友人にしか言われたことのない言葉だったからだ。そのまま自分の乳房で挟んでいたものがさきほどより大きく、強度を増していることに気が付き、さらに耳まで赤くさせた。

ギユウツ♡

「きやうつ！ や、やだ……！」

「おい、手止めんなよ」

「あ、あう、ご、ごめんなさい……でも、でも、それだめっ……ひやあっ」

「何がだめだよ。喜んでんじやねえか」

「あっ、ちがつ、んあっ♡」

肉棒を挟んでいる乳房の先端を、ずんぐりとしてかさついた指先で摘まれて沙織は腰を反らせた。摘まれるだけでなく指先で掠るように撫でられたり転がすように捏ねられたりして、沙織の声に甘いものが混じりだす。それでも沙織は肉棒への刺激を絶えず与え続けた。

「おい、乳首勃ってんぞ」

「い、いや、言わないで……んんっ♡」

「お前がな、俺のチンポを元気にさせたから代わりに乳首いじってやってんだよ。ちゃんと礼言えや」

「そ、そんな……あっ♡ や、やめ……い、言いますからっ……！」

散々弄られしつかりと勃ち上がった乳首を痛いほどに摘まれて、沙織は白旗を挙げるように声を上げた。

「ち、ち、ち、乳首っ、いじってくれて、ありがとうございますっ……ああんっ♡」

「ハッ、本当に言うのかよ、身体だけじゃないな、スケベなのはよお」

「だっ、だって、言えっ……あっ」

沙織は無理やりこんなことをさせられ言わされているのにも関わらず、身体が熱くなってくるのを自覚していた。

恐ろしさしか感じていなかったはずの自分の乳房で挟んでいるものにも一種の欲のようなものを感じ始めていたとき、男が急に立ち上がってそれが抜ける。その瞬間、沙織は寂しさのようなものを感じてしまっていた。

「マンコ出せや」

「え……？」

「マンコだよ。いいチチだが、出すならマンコだ。おら。足開け」  
「きやあつ！」

床に座り込んでぼんやりと男を見上げていた沙織は、男にその場に押し倒され太ももを掴まれ広げられて、屈辱的な体勢にされてし

まった。

「や、やだあ……見ないで……」

「ハアハア、チツ、ガキのくせにたまらねえ身体してやがるな……」

「やめて、やめてくださいいっ……！」

「うるせえっ、黙ってマンコ出せッ！」

「ひっ！ああっ……！」

仰向けでショーツを脱がされ≡字開脚にされるが、沙織は抵抗することできずただ泣くしかできない。

「ハアハア、エロい身体しちゃいるがマンコは綺麗じゃねえか」

「ゆ、ゆるしてえ、おねがい……」

「何が許してだ。身体は随分と素直じゃねえか、ええ？なんだよこれ。見ろよ」

剥き出しの割れ目に指を滑らせた男は、粘液でしっかりとコーティングされた太い指を沙織の眼前に突きつけた。沙織は泣きながら首を横に振るが、その顔は恐怖より恥辱や期待、欲に染まっていることが誰の目から見ても明らかだ。

「いや、いやあ……」

「見ろっつってんだよ！」

「ひっ！」

「なんだよこの粘こい汁はよお。嫌だったんじゃねえのか？　なんでマン汁こんな出たんだよ」

「い、嫌です、いや、いや……」

「じゃあ、チンポ耐えきれるか？」

「え……？」



「これから何されてもチンポ耐えきれんってんなら、このまま逃がしてやるよ。どうだ？」

「あ、は、は、はい。耐えます……」

「耐えきれなかったらちやあんと生チンポと精子媚びるんだぞ？ いいな？ ゴムなんか持ってねえから、中でたくさんだしてやる」

「ひっ、そ、そんな……」

「見ておけよ。これがお前が媚びることになる、レイプ慣れたオッサンの極太生チンポだからな。いいな？」

「うう……」

先ほどまで自分の胸で挟んでいた肉棒が沙織の目の前に突き付けられる。沙織が扱く前より太く大きくなりしっかりと上を向いているそれを見て、沙織の頭は恐怖より欲で支配され始めていた。

男は男性器がぴったりと沙織の女性器にくつつくようにあぐらをかいて座ると、仰向けになっていても形をくずさない乳房に両手を伸ばして揉みしだき、指先で乳首を弄びはじめた。

ムニユツ♡　むにゆむにゆつ♡　コリコリコリくくツ♡

「あふっ♡　ん♡　ん♡」

「しっかり感じてんじやねえか」

「そ、そんなことっ…：…んんツ♡」

「声は我慢するなよ」

「は、はいっ…：…あんっ…：…♡」

「声も可愛いじやねえかよ。身体全部でチンポ誘う悪い身体だなあ、ええ？」

「そ、そんなこと…：…あっあっ♡」

さきほどまで乱暴に無理やりされていたのは違い、沙織の欲情を引き出すようなタッチでされ、沙織は顔を真っ赤にさせてその快感に抗う。

クニユクニユツ♡ もにゅっ♡ むにゅうくくっ♡ コリコリコ  
リコリツ♡

「あ♡ はーっ、はーっ、んあっ♡」

「にしてもこのチチは反則だろ。女子高生がこんなチチ持ってちやだめだろうが、なあ？」

「ああっ♡ ひ、ひ、ご、ごめんなさいいっ……♡」

「彼氏にでもたくさん揉んでもらったか？ おお？」

「そ、そ、そんなことっ……♡ あんっ♡ 彼氏なんて、いなっ

……あっ♡」

「オイ、気持ちいい時はちゃんと見え。オジサンにどれが気持ちいいのかわせてくれよ。なあ？」

「んあっ♡　そ、そんな、恥ずかし、っあ♡」

「アア？　生チンポハメられてえか？」

「あアンツ♡　ち、乳首っ、こりこりされるのっ、きもちいですう

…ひいんっ♡」

「ほお。じゃあこっちはどうだ」

右手はそのまま乳房と乳首を攻め続け左手を乳房から離すと、男は粘ついた唾液を纏った分厚い舌で、美味しそうに真っ赤に実った乳首をねちっこく舐め上げた。

「レロオッ♡　吸うのにちょうどいいサイズの乳首だな。吸いがあるぜ。ぢゅうっばっ♡」

「あアンツ♡ す、すっちや……ひっ♡」

「ヂユパツヂユくパツ♡ ぢゆるるるるっ♡ ぢゆるうくうっ♡」

「ひあツ♡ いやアンツ♡ ああくっ♡」

「ぢゆっ……ぽおっ♡ ぢゆっ……ぽおっ♡ チロロロロツ♡」

「あ♡ あ♡ イイですっ、乳首れろれろぢゆぽぢゆぽされるのイ

イですうくくっ♡ ああくくんっ♡」

「ぢゆっぽおっ♡ おいおいおい、乳首だけでそんなエロ声出して

ちやあ後が思いやられるなあ」

乳房を両手で挟み、乳首を中央に寄せると、男はそこに吸い付いた。いきなり両方の乳首を吸われ、沙織は腰をしならせて喘ぐ。

「ぢゆくくくぱっ♡ ぢゆるるるるっ♡ れろおくくっ♡ ぢゆ

ぱぢゆぱぢゆぱっ♡」

「ああ〜っ♡ だめ、両方はだめっ…!!」

「おいおい、だめじゃねえだろうが。ちやんと言えつつたろ。レロレロレロオ〜っ♡」

「ひっ♡ ひっ♡ 同時、乳首同時にいじめられるのすごいつ…: あんあんっ♡ こ、こんなの知らなっ…: ああっ♡」

「ぢゆるう〜っ♡ レロレロレロっ♡ ぢゅぱぢゅぱっ♡ カリッ♡」

「あひいつ♡ か、噛んじやつ、噛んじやおかしくなっちやううっ〜っ♡」

「じゃあどれがいいんだ？ 噛むのか？ 吸うのか？ 舐めるのか？ カリッヂュパツレロオ〜っ♡」

「あ——っ♡ ぜんぶ♡ ぜんぶ♡ ぜんぶすきですう♡」

「とんだ強欲女じゃねえか。カリツカリツ♡　ヂュパヂュパぢゅっ  
……ぽおくくっ♡　れろおくくくおっ♡　れろろろろろっ♡」

「ああんツ♡　あんあんあくんっ♡」

沙織が胸への刺激で頭をいっぱいにさせていると、男の左手がいつのまにかクリトリスに伸びており、遠慮なくそこを擦った。

コスツ♡　コスコスコスツ♡

「ひっ、ひっ———♡」

「おいおい、まだイクんじゃねえぞ？」

「あ♡　あ♡　くっ、クリはあっ、感じすぎちやううっ……♡　あ  
—っ♡」

「おい、イクときはちゃんと見えよ。言わなかったら問答無用で生  
チンポハメて孕ますからな」

「ひっ、ひいっ♡　い、い、いいますっ♡　いいますうっ♡　あん♡」

「まだ触ったばかりなのにクリ勃起しきってんじゃねえか。オラオラッ」

「やんやんっ♡　イツ、イツちゃ、イクのキちやううっ♡」

「はえーなあ」

あきれたように男が言って指を止めるが、沙織の耳には男の声は入ってきておらず、腰を震わせた。あと少しでも弄ってもらえればイけたのに、と沙織はもどかしく思う。

ヌプッ♡

「クリですぐイっちまうなら、こっちか」

「あ、ああっ…♡」



クリトリスを擦っていた指が割れ目をなぞり、中指と薬指の第二関節まで、ぐちよぐちよに溢れている愛液が潤滑液となって簡単に膣に入り込んだ。それでもまた沙織は腰をガクガクと振るわせる。

又チュ♡ 又チュ♡

「んあぁっ♡ な、ナカはっ、ナカはぁっ……♡」

「おいおい、本当にチンポ耐えるつもりあんのか？」

「あ、あ♡ 耐えます♡ 耐えますう……♡」

「耐えてねえだろもう。マンコパクパクしてんぞ」

「あひっ♡ そ、そこ擦っちゃ……♡ そこ擦っちゃきもちよくなっ  
ちやうっ♡」

「どこが気持ちよくなるんだ？」

「お、お、おまんこっ♡ おまんこきもちよくっ……あぁッ♡」

「ここだな？」

∴∴ヌコヌコヌコヌコツ♡ ∴∴ヌチツ♡ コスコスコス♡

♡

「あつ♡ あつあつあつ♡ ああ♡んツ♡」

「腰ガクガクいってんぞ。指だけで感じすぎだろ」

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆび、ゆびすごいです♡ こんな♡ こんなのおっ♡ きもちすぎてだめえっ♡」

「オジサンの指は太いからなあ。自分や彼氏の指じゃこうはならんだろ？ オラオラッ」

「あゝゝゝゝゝ♡ おじさんのふといゆび♡ すごい♡すごい♡ おまんこのイイところにおじさんのゆびがあゝゝゝ♡」

「自分がレイプされてるってもう忘れてるだろ」

「あんあんあくくんっ♡ イっちや、イっちやいますうう♡」

「おつとあぶねえ。随分とよがってくれるからこつちも調子にのっちまう」

ぬぼっ♡ と男が指を抜くと、一緒に泡立った粘液がどろりと漏れる。またもや達することのできなかつた沙織は、膣口をパクパクと動かして寂しがる。

「俺アもう耐えられねえからやるぞ」

「え、あ、ああっ♡」

男は沙織の腰を掴んで自分の胡座の上に引っ張り、女性器と男性器をピトツ♡ とくつつけた。そして男は挿入しないよう気をつけながら腰をゆっくりと振り始める。

又チャツ……♡ 又チャツ……♡

「おいおい、どんだけマン汁出してんだよ。ちっと擦っただけでチンポがびしょびしょじゃねえか」

「ご、ごめんなさいいっ……♡　お、おまんこ、びしょびしょでごめんなさいいっ……♡　あんあんっ♡」

「どうだあ？オジサンのチンポぶつといだろ？」

「ふ、ふといっ……♡　おじさんのちんぽふといですっ……♡」

「このぶつといちんぽでお前のマンコ突き刺したらぶっ壊れちまうかもしれないなあ」

「だめ♡　だめですっ♡　おまんここわしちゃだめえっ♡　あんあ  
っんっ♡」

「おいおい、もうほぼ壊れてるようなもんだろ。こんなマン汁漏らしてパクパクしてよお」

又ツ♡ 又ツ♡ 又ツ♡ 又ツ♡ 又ツ♡ 又ツ♡

「ああっ♡ ちっ、ちんぽでクリこすっちやだめえっ♡」

「だめじゃねえだろうが！ 何度言ったらわかるんだっ？ アア？」

「ごっ、ご、ご、ごめんなさいいっ♡♡♡♡♡ ひ♡ ひいつ♡ す

きっ♡ ちんぽでクリこするのすきですっ♡」

「最初からそう言やあいんだよ。オラオラオラッ」

又チャツ♡ 又チャツ♡ 又チャツ♡ コスコスコスコスコ

スコスツ♡

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ちんぽコスコス、き、き、き、

きもちよすぎますっ♡♡♡」

「喘ぎすぎだろっ、こりやもうセックスだぞっ？」

「ひああっ♡ せ、せ、セックス♡ セックスきもちっ♡」

「どんだけスケベなんだよこの女っ、クソッ！」

「ンあああっ♡ きっ、きちやう♡ キちやつ♡ イきますっ♡  
イツちやううっ♡ イ、イー——ッ♡」

「おっと、ここまでか。これじゃア俺がイけねえなあ」

男はそう言いながらも、何度も何度も、沙織が達する直前で止めて、少し経ってからまた性器同士を擦って沙織が達する直前で止めて、と繰り返した。

先に耐えきれなかったのは、沙織だった。

何時間もの長い間寸止めを繰り返されたように沙織には思えたが、実際は十分にも満たない。

「ひ、ひ、ひ♡ なんて、なんで止めるのお……♡」

「お前がいくまでやったら話が違うだろうが。チンポ耐えきれるか

どうか見てんだからよお」

「い、イかせてください、おねがい、おねがい……♡」

「おい、聞いてんのか？　いきたいなら生チンポでだ。どうする。生チンポ媚びるか？」

ずっと寸止めのままか。

生で挿入されてしまうのか。

その二択で、沙織が前者を選ぶにはもう、時間が経ちすぎている。

「お、お、おじさんの、極太生ちんぽ♡　わたしの♡　わたしの  
おっ、おちんぽ我慢できないすけべなおまんこすこすこしてこわし  
てくださいいッ♡」

レイプ犯に車に連れ込まれ生チンポ懇  
願するまで寸止めされ子作りセックス  
にハマってしまう真面目巨乳JK\_体験  
版

2021年 5月 1日発行

2021年 11月 27日改稿

---

♡どん丸／がら堂

♡Twitter : @donmar18